地域連携活動：
理科実験講座「身近な夏の不思議体験2019イン山科」

Event.

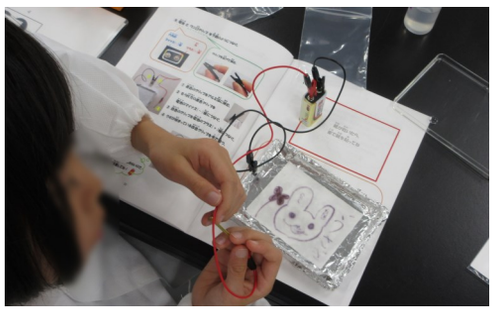
学生実習支援センター 助教 髙尾 郁子

7月28日（日）本学A22実習室にて、市民組織『山科区「はぐくみ」ネットワーク』と共に、理科実験講座「身近な夏の不思議体験2019イン山科」を開催しました。地域の小学生に理科の楽しさを知ってもらいたいと始まったこの講座は今年で9回目を迎え、山科区の小学生の夏の恒例行事になっています。

今年のテーマは「ヨウ素デンプン反応」。当日は学生実習支援センター教員と企画・広報課職員のほか、地域ボランティアスタッフのサポートのもと、抽選で当たった小学生140名が午前と午後の部に分かれ、3つの実験を通じて身近な科学の不思議を体験しました。

科学者のたまごたちが実験室に集合

「身のまわりのデンプンを探してみよう」では、こんぺいとうやポテトチップスなど、普段食べているお菓子の中にデンプンが含まれているかどうかを一緒に調べました。また発展編の「お米の違いを調べてみよう」では、もち米とうるち米をつぶした液にヨウ素を含むうがい薬を加え、デンプンの構造の違いを反応液の色の違いとして観察し、それぞれのお米の特徴をデンプン構造と紐づけて楽しく学んでもらいました。特に人気が高かった「電気の力で紙に字を書いてみよう」では、ヨウ化カリウム水溶液の電気分解を利用し、デンプン水溶液を浸み込ませた紙に文字や絵を書きました。電気ペンが紙に触れた瞬間に現れる紙に浮き出る鮮やかな紫色に感嘆の声が響き、自然現象の不思議さを感じながら夢中で絵を描いている姿が印象的でした。



電気ペンで絵を描いて楽しみました

実施後のアンケートでは「デンプンに色々秘密があってびっくりした。どうしてこんな色になるのだろうと疑問が出てきた」、「理科は楽しくて面白いことがわかったし、身の回りにあることがわかって調べてみたい」などの感想をいただきました。今年も参加した子ども達に身近な科学の楽しさや不思議を実感してもらえ、とても嬉しく思います。

講座の実施にあたり、約20名の地域ボランティアスタッフが応援に駆け付け、各実験台にて子どもたちの実験をきめ細やかに指導・支援していただきました。この場を借りて市民組織『山科区「はぐくみ」ネットワーク』実行委員会の皆様に深く感謝申し上げます。

地域ボランティアスタッフのサポートは欠かせません

今後も地域に根差した大学の役割として、近隣学区の児童・生徒の理科教育の一助になればと期待し、継続していきたいと考えています。

なお、本講座は国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」の助成を受けて実施したことを申し添えます。